‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

９７号 1995.6.11
文・編集・発行
恋 怪子

CD：大槻ケンヂ「ONLY YOU」

MORRIEの「影の饗宴」のなかの「一瞬だったら」という歌は「君の心に浮かんでくるのは／遠い昔の亡霊／君の耳元　吐息を吐いて／気持ち良いから済し崩し」という歌詞ではじまる。大槻ケンヂの「ONLY YOU」を聴く前は、ここの部分を「いくら気持ち良いからといって、遠い昔の亡霊の吐息で済し崩しにはなりたくない」って納得していたくせに、「ONLY YOU」を聴いて真っ先によびさまされたのは、「遠い昔の亡霊」といってもいい感情で、気持ち良いんならいいじゃないか、「郷愁」に心をまかせたっていいじゃないかってってなってしまった。だって、このアルバムで真っ先に入っている一曲目の「オンリー・ユー」（ばちかぶりのカバー）はギターがJUN SKY WOLKER(S) の森純太で、大槻ケンヂ本人がライナー・ノーツの最後に、

「全曲心を込めて唄いました」

と書いているとおりの心のこもった熱唱のバックに、７年も８年も前に好きだった頃のJUN SKY WALKER(S) を思い出させる懐愁しいまっすぐなギターの音色（大槻ケンヂによれば『ストレートでかっこいいギター』）が聴こえてきて、もう涙がとまらなくなったんだもの。たしかに「気持ち良い」。ということは「済し崩し」なのか？私は一方ではMORRIEの自己完結と言えるような境地になりたいと思っているのに、どうしてももう一方の、そうはなれない自己不完結＝自己矛盾＝弱さにとらわれて、心の病にかかってしまう。だから「ONLY YOU」の大槻ケンヂの不完結＝叫び、にひどく共感してしまうのだ。
大槻ケンヂが「ONLY YOU」のライナー・ノーツで

「今回、選曲のために10代の頃に聴いていた日本のパンク、フォーク、ニューウェーブを片っ端から聴いてみたのですが、そしたら、ほんとうにグングンと心が癒されていくことに気づいたんです。つまり『音楽が人の心を癒す』ということを僕は10年以上ミュージシャンをやりながら、28にして初めて気がついてその効果にものすごく驚いたわけです。それで、『これは…』と思って、以来、僕はこのアルバムを作ることにズーンとハマっていったんです。本音を言えば『ライブだけがともかくやりたい』という気持ちで始めたソロアルバムだったんですが、どんどん自分の過去を振り返る作業、つまりは自分の人生を振り返る作業になっていって、心の病も音楽にのめりこむことによって、だんだん癒されて快方に向かっていったわけです」

と言っていることと、「屋根の上の猫」（パンタのカバー）の解説で、

「パンタさんの唄って『体に愛を突き刺して』とか、僕にはとても唄えないような、実にストレートな歌詞が多いんですよ。『Yeh!Yeh!Yeh!』とか。筋少ではとても唄えないんですが、パンタさんの曲なんでここはひとつ思いきって唄ったら、ス〜ンゴク気持ち良かったですね」

と言っていることが、とても身にしみた。
「過去を振り返ってはいけない」と一方的に決めつけていたこと、知らず知らずに「自分はこうなんだ」と自分を縛っていたことに気がつかされた。心がやすらぐなら過去を振り返ったっていい。「昔はよかった」を、貧弱な現在の無為の言い訳にするなら、それは「済し崩し」だろう。そうじゃなくて、なんとか心を「現在もいい」にもっていけるなら「昔はよかった」もOKなんじゃないかって思った。そして、自分を縛っていたことに気がついたらそれを解けばいい。その大切さが身にしみた。大槻ケンヂの「ONLY YOU」には「人の心を癒す」力があったことはたしかだ。
「ONLY YOU」は日本のインディーズロックのカバーアルバムで、このなかで「タンゴ」と「もうがまんできない」の２曲カバーされているJAGATARAのメンバーだったOTOがこのアルバムについて、

「どうしたオーケン！　全編せつなさの嵐だ。しかもどうだ、この怒濤の勢いは！（中略）80年代の名曲が本家のものよりえらく瑞々しく迫ってくるのは、ひたすらオーケンの『オンリー・ユー』のとらえ方に漂うせつなさ故なんだと思う。愛周辺の言葉では言えっこない痛切なラブ・ソング集だ」（「ぴあ」より）

と言っているくらいだから、どの曲もオリジナルは聴いたことがない（このアルバムを聴いてから「メシ喰うな」の一曲だけはオリジナルを聴く機会があったが）私には瑞々しく感じられるのはあたりまえで、どの曲も大槻ケンヂのオリジナルとして聴いてしまう。ちなみに、大槻ケンヂが「ONLY YOU」でカバーしている曲のオリジナルを聴いてみようという気はまったく起こらないから、

「全曲カバーだと聞いて“ほぉ”と思い、選曲を聞いて呆れた。ナゴムで出した曲が４曲も入ってるし、しかもそのうち１曲、ばちかぶりの『オンリー・ユー』をシングル・カットするという。暴挙だ。でも、はねっかえりでナゴムの復刻ＣＤが売れてくれればこんなに嬉しいことはない」（「ぴあ」より）

というKERAの思惑にはそえないことになるけれど……。
「私はみまちゃん」（空手バカボンのカバー．ラップが苦手の私でも楽しめるすごい歌）の解説で大槻ケンヂ自身が、

「まぁ、現段階では、僕はこの『ONLY YOU』というアルバムが地球一好きなんですが」

と言っているけど、そうだろうな。歌い方がいいし、思い入れがまっすぐに伝わってくる。１曲目の「オンリー・ユー」でガーッとひきこまれたまんま「ロマンチスト」までいって、６曲目の「カレー・ライス」からねじれて、９曲目の「メシ喰うな」でゴリゴリして　10曲目の「屋根の上の猫」で大団円をむかえる。そのあとの「BYE-BYE」でふにゃふにゃしながらも、これが実に気持ちいいのだが、意味のある終わりが来る。そして、「オンリー・ユー」のアンプラグドでCDが終わる。この曲順がサイコーだ。そして「オーケン自身による全曲大解説」（ライナーノーツ）がすばらしい。単なる解説をはるかに超えて、大槻ケンヂ自身がくっきりと表れている。
筋肉少女帯はメジャー・デビューしたときから今までに何回かライブにも行ったし、CDを何枚も聴いていてずうっと好きだったけれど、それでもこの「ONLY YOU」を初めて聴いたときは「大槻ケンヂってこんなによかったっけ？」って思った。それで今までの筋肉少女帯のCD（「月光蟲」、「サーカス団パノラマ島へ帰る」、「断罪！断罪！また断罪!!」、「筋少の大車輪」、「エリーゼのために」、「UFO と恋人」）を聴きなおしてみた。そうしたら「あ、大槻ケンヂは筋肉少女帯のヴォーカリストなんだ」っていう、あたりまえっていえばあたりまえのことが実感ったし、歌詞もそれまでより深く聴けるようになって、筋肉少女帯というバンドをそれまでより数段よく聴けて、「ONLY YOU」ばかりか筋肉少女帯にもすっかりハマってしまっている。
「ONLY YOU」以後の筋肉少女帯を楽しみにしている。

WORDS：田口トモロヲ（「ぴあ」より）

大槻くんは自分の番組やコラムで、僕の事を紹介してくれる時、天才だの、若きデニス・ホッパーだのと、恥かしい程大仰に誉めちぎってくれる。だからと言う訳も多分にあるが、大槻くんは実にナイスガイな天才である。天才と狂人は表裏一体である。今度のアルバムで僕達“ばちかぶり”のカバーをしてしまうところなど、実に狂気の沙汰だ（しかも2曲も!?）。天才は人のやらない事をやる／　この、あまりに無謀な行動力こそ、大槻くんの天才性を証明している。
かつてナゴムという自主制作レーベルがあり、そこで僕らはバンド同級生だった。他のバンド連中がいつの間にか消えて行く中、ナゴム連中は結構生き残った。それは、他のバンドにはない演芸的才能があったからだと思う。大槻くんはその最たる者で、彼こそ残るべくして残った本物のサバイバル・ロッカーである／　大槻公認の天才の僕が言うんだから、きっと間違いないに違いない。

田口トモロヲ
ばちかぶり／「オンリー・ユー(唯一人)」「未青年」
ばちかぶりは現在活動休止状態にあるが、思い出したようにライブを行うこともある。“俳優・田口トモロヲ”としても、映画「君といつまでも」に主演するなど、精力的な活動を見せている。

WORDS：内田雄一郎（「ぴあ」より）

4年程前、筋肉少女帯はニュー・アルバムの制作にとりかかっていた。バンド・ブームの絶頂期も過ぎた前作の売れ行きの落ち込みを鑑み、新たなイメージチェンジが我々に課せられていた。そんなとき大槻はなんとカバー・アルバムを作り「とん平のヘイ・ユウ・ブルース」を歌いたいと言い出した（他の候補曲に「黒の舟歌」「夢は夜ひらく」等があった）。アレンジも変えずに原曲に忠実にコピー、いやカバーしたいという大槻の野望は、当然ながらプライドの高い他のメンバーから大反対される。中でも筋少のメタル担当、橘高文彦の反発はすさまじく、「ヘイ・ユウ・ブルース」をやるならバンドをやめるとまで言い放った。「この曲を筋少でやるなら、俺がいる必要はないからやめる。どうしてもやりたいのなら自分のソロでやってくれ。大槻のソロだったら俺は喜んでギターを弾いてやる」。この至極当然明快なる職人気質的反論の前には、さすがの舌鬼大槻も前言撤回を余儀なくされた。
今、大槻はそのときの野望を実現させた。日本のロックの名曲揃いだが、選曲は非常に趣味性が高い。それゆえに恥ずかしい。とっても恥ずかしい。結構恥ずかしい。その点、普通のミュージシャンには真似出来ない怪作であろうか。しかし1曲だけ毛色の違う「ヘイ・ユウ・ブルース」が入っているのは、大槻の意地か？　過日の約束通り、橘高は「ヘイ・ユウ・ブルース」を弾かされたそうだ。

内田雄一郎（筋肉少女帯）
空手バカボン／「私はみまちゃん」
同じ学校の先輩のKERA、そして大槻と組んだのがこの空手バカボン。'89年には大槻とふたりで“まんが道”なるユニットを結成したことも。筋少のベーシストであり、大槻以外では唯一のオリジナル・メンバーだ。

CD（「サーカス団パノラマ島へ帰る」、「断罪!断罪!また断罪!!」、「UFOと恋人」）解説：NOB